

のらボーイ&のらガール 食農教育プロジェクト

教育・研究

課外活動

ボランティア

地域交流

代表者：農学部生物生産科学科 3年 佐々木 亮輔

連携先

のらつくす農園、久松農園、アサザ基金、グランドワーク笠間、そば打ち同好会

顧問教員

小松崎 将一（農学部・教授）

参加者

寺尾 正樹（農学部生物生産科学科 2年）
松岡 拓志（農学部地域環境科学科 2年）
佐藤 充（農学部地域環境科学科 2年）
山田 尚主（農学部資源生物科学科 2年）
高間 梨央（農学部生物生産科学科 2年）
増澤 龍一（農学部生物生産科学科 2年）
松山 直樹（農学部生物生産科学科 2年）
田辺 修都（農学部生物生産科学科 2年）
佐々木亮輔（農学部生物生産科学科 3年）
赤石 太郎（農学部生物生産科学科 3年）
小林 希美（農学部生物生産科学科 3年）
國分 拓也（農学部生物生産科学科 3年）
鎌塚 倫成（農学部生物生産科学科 3年）
飯村 拓也（農学部資源生物科学科 3年）
小野 涉（農学部資源生物科学科 3年）
五十嵐瑞稀（農学部地域環境科学科 3年）
木村 茉由（農学部地域環境科学科 3年）
久保田智大（農学部地域環境科学科 3年）
小林 佳奈（農学部地域環境科学科 3年）
向井 龍太（農学部地域環境科学科 3年）
渡邊亜由子（農学部地域環境科学科 3年）
青木 拓矢（農学部生物生産科学科 4年）
大澤 夏樹（農学部生物生産科学科 4年）

野口 真希（農学部生物生産科学科 4年）
野部 寛人（農学部生物生産科学科 4年）
小野間智秋（農学部資源生物科学科 4年）
松嶋 優李（農学部資源生物科学科 4年）
石井 暁（農学部地域環境科学科 4年）
中津 祐也（農学部地域環境科学科 4年）
曲山 康平（農学部地域環境科学科 4年）
増田 裕典（農学部地域環境科学科 4年）

プロジェクトの概要

現在、農業に関わる人たちの数は減少しており、食や農業に関する知識、関心の低下が危ぶまれています。それは国内トップクラスの農業産地である茨城県でも例外ではありません。私たちは農業との関わりが薄い方たちに食や農業について正しく知ってもらおうと共に、地域をより活発に盛り上げることを目的としています。

主な活動としては耕作放棄地を利用した耕作・食農教育イベントの企画、農業・農村を応援する大学生サークルネットワークへの参加、NPO法人グラウンドワーク笠間さんとの協同活動、牛久沼周辺の耕作放棄地の開拓、学園祭への出店などがあります。

活動日は基本毎週土曜日で、このほかに農作業の関係や食農教育イベントの開催、外部連携との活動のために、不定期に活動が追加されます。

プロジェクトの成果報告

- ・耕作放棄地を利用した耕作、イベントの企画

現在、2つの圃場を持っており、どちらも耕作放棄地だった場所でした。今年度はそばや夏野菜、小松菜、サツマイモ、落花生、スナップエンドウ、バジルなどを栽培しました。

また、私たちは自分たちの圃場を利用して小学生とその保護者を対象に食農教育活動を行いました。夏にピザ窯を製作し、小学生たち夏野菜の収穫からピザの調理体験をしてもらいつつ、そばの種まきも体験してもらいました。秋にはサツマイモ収穫・焼き芋づくりを体験してもらいながら、成長したそばを収穫してもらい、千歯こきや唐箕などの道具を利用して脱穀してもらいました。

→農業をする女性のイメージアップにつながった。

日本で最も耕作放棄地の多い茨城県で農地を有効に活用できた。

本格的な食農教育により、児童やその保護者が「食」や「農」に対する正しい知識、理解を得ることができ、農業における担い手不足や「食」の分野における食生活の乱れなどの課題に良い影響を与えられた。

茨城特産の常陸秋蕎麦の知名度あげることができた。

- ・農業・農村を応援する大学生サークルネットワークへの参加

全国の大学の農業サークル17団体が参加しているネットワークで年に数回、各県で交流会を兼ねた農作業を行っています。夏に世界農業遺産である金沢の千枚田で稲刈りを、冬に沖縄県にあるサトウキビ畑でサトウキビ狩りなどを行いました。このように県内にはない伝統的な農業に触れることに加えて、志を同じくした全国の様々な仲間たちとの情報交換により、互いの長所を取り入れながら、

今後の活動への士気を上げることもつながりました。

- ・NPO法人グラウンドワーク笠間さんとの協同活動

笠間のまちおこしを目的としたグラウンドワーク笠間さんの活動にご一緒させていただき活動しています。農業の6次産業化のための研究、作物育成、町のお祭りのお手伝いなどをおこないました。

- ・牛久沼周辺の耕作放棄地の開拓

千葉大学の援農お宝発掘隊さんと協働しているプロジェクトで、今年度からスタートしました。今年度は牛久の耕作放棄地を水田に戻し、実際に稲を育てることに成功しました。この水田の今後の有効な利用方法を現在模索中です。

- ・学園祭への出店

圃場で育てた作物を販売しました。また、来場者へのアンケート活動も同時に行うことでその年の食農教育への関心やどのようなニーズがあるかを調査しました。

- ・今後の課題・展望

今年度の食農教育活動では阿見町内で最大の阿見町中央公民館をお借りして、定員まで参加者を募ることができました。よって、今年度の規模が阿見町での食農教育活動の限界となったことが課題となるので、来年度以降は、イベントの2日間日程での開催や行政などとのさらなる連携、協力を試みます。